

「日本 T. S. エリオット協会研究会」のお知らせ

本年 4 月より、日本 T. S. エリオット協会では会員相互の交流と新しいエリオットの読者層の開拓を目的として、「日本 T. S. エリオット協会研究会」を立ち上げました。来る第 2 回では、3 名の協会員とともに、さまざまな観点から「J・アルフレッド・プルーフロックの恋歌」の面白さを探る「読書会」の形式でご一緒できればと思います。エリオット協会会員に限らず、本研究会に興味のある方も参加できますので、お知り合いやご指導されている学生をお誘いいただいて、ふるってご参加ください。

日本 T. S. エリオット協会第 2 回研究会プログラム

2024 年 9 月 22 日（日）14.00-16.30 オンライン（Zoom）

【読書会】

「J・アルフレッド・プルーフロックの恋歌」を読む

小原 俊文（尚絅学院大学名誉教授）

西谷 茉莉子（京都府立大学）

清川 祥恵（佛教大学）

◆ 「J・アルフレッド・プルーフロックの恋歌」作品紹介

エリオットの最初期の詩「J・アルフレッド・プルーフロックの恋歌」(1915)は、「出かけよう、/きみとぼく・・・」と始まりますが、「きみ」が誰のことを指すのか最後まで示されず、「ぼく」が置かれている状況も直ちには伝えられません。このプルーフロックと思しき語り手は、サロンで女性に思いを打ち明けようかと思案しているようですが、女性の反応や他の女性たちの噂話を気にするあまり実行に移すことができず、決意してはそれを取り消すということを繰り返すばかりです。この詩ではひとりの平凡な中年男性の逡巡が描かれるのみで、新たなストーリー展開につながるアクションは起こりません。しかし、語り手の意識に次から次へと浮かんでは消えるイメージの鮮やかさ——じわじわと麻醉が効いている患者の意識に見立てられた夕方の空、猫のようにしなやかに跳ぶ霧、ピンで磔にされた虫、幻燈機によって映し出された神経組織——に誰しもが圧倒されるのではないでしょうか。

「プルーフロック」が文学史上重要な作品であることは疑うべくもありませんが、本研究会では肩ひじ張らず、素朴な疑問を出発点として皆さんと自由にディスカッションできればと考えています。この詩では何が起きているのでしょうか。さんはこの詩がお好きですか。

◆ 登壇者略歴

小原俊文（おばら・としふみ）

尚絅学院大学名誉教授。2023 年 5 月より同大学生涯教育オープン・カレッジの講師として、イギリス文学・文化の視点から「シャーロック・ホームズ」の講座を担当している。主な研究業績に『マージナリア:隠れた文学/隠された文学』論文掲載（鶴見書店、1999 年）、『美神を追いて:イギリス・ロマン派の系譜』論文掲載（鶴見書店、2001 年）、『モダンにしてアンチモダン:T.S.エリオットの肖像』論文掲載（研究社、2010 年）、『四月はいちばん残酷な月:T.S.エリオット『荒地』発表 100 周年記念論集』論文掲載（水声社、2022 年）、その他尚絅学院大学紀要への投稿論文がある。

西谷茉莉子（にしたに・まりこ）

京都府立大学文学部准教授。専門は、W.B. イエイツを中心とした現代アイルランド詩。近年では、北アイルランドの詩人、ジョン・モンタギューを主な研究対象としている。共著として『文学都市ダブリン』(春風社、2017 年)、*Irish Literature in the British Context and Beyond: New Perspectives from Kyoto* (Peter Lang, 2020)など。近刊予定のものに『アイルランド文学の核心』(春風社)、『アングロ・アイリッシュ文学の光芒』(而立書房) がある。論文としては、“Repetition and Magic in Yeats's Early Poetry”(『エール』第 34 号)、「ジョン・モンタギューとアイルランド語をめぐって—The Rough Fieldを中心に—」(『コルヌコピア』第 31・32 合併号) など。また、T.S. エリオットの影響を現代アイルランド詩の文脈の中で捉えることに関心を持っている。

清川祥恵（きよかわ・さちえ）

佛教大学文学部講師。専門はウィリアム・モ里斯を中心とするヴィクトリア時代の中世主義、ユートピアニズム、および近現代における「神話」の再創作。共編著に『「神話」を近現代に問う』(勉誠出版、2018 年)、『人はなぜ神話〈ミュトス〉を語るのか——拡大する世界と〈地〉の物語』(文学通信、2022 年)。近刊予定に論文「崩れ墜つ天地のまなか——原民喜の幻視における魔術的現実」(斎藤英喜編『文学と魔術の饗宴・日本編』小鳥遊書房、2024 年 9 月)、シンポジウム報告「『荒地』を眺める——T. S. エリオットが描く神話世界」(*T. S. Eliot Review*, 2024 年 11 月) などがある。